

個人の変容

アーサー ヒルコート氏



サイ・アヴァターの70歳御降誕祭を迎えるにあたり、私たちはしっかりと自問しなければなりません。「サイの御姿をとって地上に降臨された神のお誕生日の祝祭に、私は何を捧げることができるだろうか？」と。まだ神に属していないもので、私たちから捧げることのできる物などあるのでしょうか？ それでも尚、私たちのハートには、神がお受け取り下さるに値する何かをお捧げしたいという、やむにやまれぬ強い熱望があります。なぜなら、すべて存在するものは神のものではありますが、たった一つ私たちに残されている捧げものが、自分自身の内なる変化—**自己変容**—であるからです。

「変容」という言葉は、書くことも語ることも容易いのですが、この言葉の意味を達成するのは遥かに難しいことです。なぜ難しいのでしょうか？ 私たちはこの『起きて見ている夢』の中で数多くの人生を送り、自分を完全に人間の姿と同一視し、肉体と心（マインド）を含むこの世界と世俗の事物への執着を育ててしまったからです。その結果、私たち自身の真の本性は無知のヴェールの後ろに深く隠されてしまい、私たちはこの世界とそこに存在する一切を現実として見て、自分自身が行為者であり、為されたことすべての達成者であると信じています。

映画を見るとき、私たちはスクリーン上の幻影に気をとられてしまい、映像が投影されているスクリーンそのものに思いを致す事はまずありません。同様に、私たちが焦点を合わせているのは、この世界、肉体、心、感覚、言い換えれば、意識そのものを抜き

にした意識のスクリーン上に現れている幻影の方なのです。あるインタビューで、スワミは創造についての質問にお答えになり、「いやいや、違います。創造ではありません。投影です」とおっしゃいました。それゆえ世界、宇宙という幻影は、意識そのものによって意識のスクリーン上に投影されているものであり、人はこの幻影である夢と、夢の中の一切を現実として信じ込んでいる、と受け止めることが理に適っています。それゆえ、これを睡眠中に見る夢に似た『起きて見ている夢』と呼んでもよいかもしれません。「人生が夢でなどあるはずがない。私たちの人生の幸福や愛、それに様々な形の苦しみは実在しているのだから」と言われてきました。私たちはその現実をすべて見て、聞いて、触れて、嗅いで、経験しています。眠っている時も、私たちは夢の中で様々な出来事を経験しています。しかし、夢の中の幸福、苦痛、人間、世界、その他一切は実際には現実ではないのに、夢を見ている間はとても現実的でリアルではないのでしょうか？ 見る夢の性質いかんによって、目覚めたとき「もっと夢を見ていたかったのに…」とか「ああ神様、ありがとう！ ただの夢でよかった」とほっとしたりしませんか？ 『起きて見ている夢』は、時間と空間の概念の内に設定された夢に他なりません。それゆえより信憑性があるのです。だからこそ、最愛なる神はサイという御姿で降臨され、霊的変容のプロセスを通して、私たちをこの『起きて見ている夢』から目覚めさせ、小さな自己(自我)から大いなる自己(真我)へ向かう道に沿って導いて下さっているのです。では、私たちは個人として何をすべきなのでしょう？ この変容をもたらすためにどんな努力をすべきなのでしょう？ 私たちはサイ・アヴァターの御教えを読み、聞き、吸収し、黙想し、それを実践して生きなければなりません。

今日、私たちの幸運をととても言葉で言い尽くすことはできません。父なる神ご自身が、愛すべきサイの御姿をとって地上を歩いておられるばかりか、神は私たちを今回の人生においてお傍に引き寄せて下さったのです。この機会を与えて下さったおかげで、私たちはスワミのお顔を見つめ、スワミの御言葉を聞くことができます。そしてスワミご自身が、サイの御姿を通して表わされている形なき真我、絶対実在、純粋な愛へと還る旅の導き手となって下さっているのです。

しかしながら、私たちは父なる神の御言葉を聞いて、それに基づいて行動しているのでしょうか？ あるいは単にババ様を通して表現されている神聖な愛を楽しむだけで、ババ様の御教えに関しては何の努力もしていないのでしょうか？ 私たちはあらゆる聖典の引用句を暗唱することができるかもしれませんが、しかし、もしそこに含まれている御教えを生きていなければ、それが何であれ価値はありません。神は私たちに、変容を遂げるための努力をしなければいけないと教えて下さいます。私たちが自分を神の道具とみなし、良き道具となれるように祈ることは良いスタートになります。

私的な体験は、個人の変容のために必要なアナロジー（類似）を与えてくれます。ある夜、私はバンガロールのホテルの部屋で手紙を書こうとしていましたが、その部屋の電灯はあまり明るくありませんでした。調べてみると、部屋中の電球はすべて 25 ワットだったのです。ホテル側にこの不備を伝え、手紙を書くのに十分な明るさの 100 ワット電球が取り付けられました。このとき、私の心にある考えが浮かびました。25 ワット電球は光がとても弱く、100 ワット電球はとても明るいのですが、両方とも同一の電流に接続されています。ですから照度の違いは各々の電球のワット数によるものです。電流は常にそこに流れており、それ自体を光として表現する準備があるのですが、特定の電球の抵抗要素によって制限されるのです。電球が光を創り出すではありません。それはただ光として表現されるために使われる電流の道具に過ぎません。私たちは、人間を電球として、神を神聖な電流として見なければいけません。この電流は、いつでも神の道具としての私たちを通して神ご自身を表す準備ができていますが、私たちは自分の内にある変容に抵抗する各々の抵抗度数によって、自らを制限しているのです。この抵抗要因というのは、私たちが感覚に束縛される度合いと同義語であり、この世への執着のことです。

しかしながら、この類似を使うときに理解しておかなければならないのは、電球の抵抗要素の増加こそが電流をより明るく輝かせてはいるけれども、心や肉体の内にある抵抗が減少すれば、神聖な愛の光が燦々と輝いて流れ出すのを許す純粋意識は増大する、ということです。

神は、私たちが自己変容を成し遂げるのを助けるために、五大価値である真理、正義、平安、愛、非暴力をお与え下さり、それゆえ私たちは神のミッション（使命）において価値ある道具となれるのです。五大価値の旗艦（司令官が乗る軍艦）は愛です。それはすべての中で最も大きな力であるだけでなく、すべての価値をつなぐ基礎となる黄金の糸です。霊性の旅の始まりに、私たちは愛情深く親切でなければならないと言われ、そうなるように努力します。しかしこれは単なる世俗的な愛であり、この愛を与えるのは、他人に対して自分がどう感じているかという条件付きです。一般的には、自分が OK（良い）と感じる人に対しては愛情深くなりますが、OK（良い）と感ぜない人にはそうなりません。サイである愛、イエスである愛、ラーマである愛、クリシュナである愛、ブッダである愛、その他偉大な人々であるその愛は、その人のあるがままの愛です。それは差し出されるものではなく、執着による期待や失望もありません。人は、その愛なのです。どこに差し出したり、差し出さなかったりする必要があるでしょうか？ マンゴーの木は、その実をある人には差し出し、別の人には差し出さなかったりしません。マンゴーの実はただそこにあるだけです。ある人はその木から実をもぎ取り、別の人は一つも取らないかもしれません。しかし、マンゴーの木はどちらからも影響を受けません。

本来そうである愛のわずかな兆候だけでも手に入れるなら、もはや努力したりしなかったりする必要はありません。私たちはただ単に、自分自身である愛でなければならないだけであり、それは万人にとって可能なことです。立居振る舞いに関しては、礼儀正しく行動しないと、不快な振る舞いのせいで他人の面前から立ち去らなければならないかもしれません。しかし、人の本性は愛であるため、その愛は常に万人のためにそこに存在しており、様々な振る舞いの性質とは何の関係もありません。

私たちはこの二元性の世界に生まれてきました。「ただあるがままに」という悟りを得て、「善」と「悪」、「幸福」と「不幸」という二元性を乗り越えるまで、平安や静穏は手に入らないでしょう。多様性という断片を包含する一体性をごらんください。自分がこの人生で演じるべき役割を満足して受け入れ、それを生き抜くのです。それは意識の内面で起こっている壮大な芝居に過ぎないと知り、誠実に演じなさい。しかし、舞台上の役者のように、様々な役割、脚本、結果には影響されずにいることです。燃え盛る火の映像がスクリーンに映し出されると、スクリーンは何らかの影響を受けますか？ スクリーンは炎によって黒焦げになりますか？ もし映像が激しい豪雨や洪水であれば、スクリーンは水浸しになりますか？ 投影された映像が何であれ、スクリーンはそれらの出来事からは何の影響も受けないのです。

ババ様は、人は過去世での思考、言葉、行動ゆえに、現在の自分の人生で起こる出来事的设计者である、とおっしゃっています。人生の中で何が起ころうとも、それは私たちにとって厳密に正しいことであり、ある出来事を良い、別の出来事を悪いと見なすのではなく、ただそれらを自分の人生の一部として受け入れるべきなのです。

理解不足のために、人は好ましくないこと、悪いと見なす出来事は受け入れません。私たちは自分にこういった（好ましくない）出来事をもたらすために使われた他の神の「道具」たちに対して、ネガティブな（否定的）反応を示すかもしれません。けれども、喜びや惨めさを引き起こしているのは、人生で起こる出来事ではありません。それは、単にそういう出来事に対するその人自身の反応に過ぎないのです。別にそれらが容易いことだと言っているわけではありませんが、出来事そのものにはエネルギーがないことを理解しなければなりません。それらはただ過ぎ行く雲です。私たちは、自分に幸福や悲惨、落ち着きや怒りをもたらすエネルギーを与えています。そのエネルギーは完全にその人自身の在り方によって決まるのです。

私がある女子大学で11年生150人を前に講演したときのことです。人生における行動と反動について話していたとき、私は一人の女子学生にこう尋ねました。

「たとえば、あなたが月曜日に学校へ来て、あなたの親友が金曜日にあなたの悪口を言

っていたと聞かされたとします。あなたはどう感じますか？」 彼女は答えました。

「私は傷つき、怒りがわき、取り乱し、泣いてしまうでしょう」

なぜそんな反応をするのかと尋ねると、

「親友が私の悪口を言うなんて思いもよらなかったからです」と答えました。そのように取り乱すのは当然のことでしょう。しかし、もしその出来事がそんなにひどいことならば、なぜ彼女は土曜日と日曜日には取り乱さなかったのでしょうか？ 出来事（悪口を言われたこと）自体は、エゴ（自我）の気づきがあるまで何のエネルギーも持っていなかったからです。それから後、取り乱し、怒る、という選択によって活動するエネルギーを与えられたのです。誰も私たちが不幸にすることはできません。それは人生の中で起こって来る出来事に関して自分自身で選択しているのであり、多くの場合、私たちは感じたままに他人を責めてしまいます。時には神ご自身を責めることさえあります。人生は単純です。起こっているように見える出来事に反応することで、私たちが複雑にしてしまうのです。

神は私たちが『神の家』に呼んでおられます。もし私たちが、少なくとも神の御教えを生きるという努力をするなら、『神の家』への旅路は、感覚とこの世界にしがみついているよりもずっと早く終わることでしょう。

私たちは理解しようと努めなければなりません。人生の出来事に対する自分の反応が、幸福と不幸をもたらしているということ。人生における出来事は、過去に自分が蒔いた種によって起こっているに過ぎないということ。真実を言えば、何一つ起こってはいません。それはただの夢です。人は夢の中の夢想家であり、夢の中で夢を見ており、夢そのものなのです。そして人は理解します。どこにも道や旅はなかったのだ…と。自分が体験してきたすべては、意識の活動に過ぎなかったのだ…と。

この霊的理解、意識の活動に到達する努力こそ、この時代のアヴァターである私たちの最愛のバガヴァン・シュリ・サティア・サイ ババ様に捧げ得る、唯一で最大の贈り物であり、必ずやババ様が喜んでお受け取り下さる値打ちのあるものではないでしょうか？

すべてを委ね、変容を遂げなさい。愛の中に生き、神の中にとどまりなさい。

出典：“SAI VANDANA” P213